沈黙の15分～ラスト15分の奇跡

あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
沈黙の１５分～ラスト１５分の奇跡

【Ｎコード】
Ｎ３１８９ＢＡ

【作者名】
あこ

【あらすじ】
ラスト１５分……。
それが、彼らに残された時間だった。
その１５分に何があったのか……。

これは、劇場版名探偵コナン　沈黙の１５分のラスト１５分を小説化したものです。

1．ダム決壊

あの時、コナン達を狙撃したのは、遠野みずきだった。妹・遠野なつきの事故の真相を告白し、泣き崩れる。そんなみずきの肩を、武藤は優しく抱いていた。
一同が優しく2人を見つめる中、哀がふと回りを見渡すと、一刻を争う非常事態が発生していた！
「江戸川くん！ランプが点滅してるわ！！」
「何っ？！」
哀の叫びで、コナンが弾き飛ばされた起爆装置に目をやると、起爆装置がオンになっていた。
直ぐ様、コナンはダムに身を乗り出し、管理事務所から見つけた爆弾を確認する。
そこには、起爆装置同様に、怪しく点滅する光があった。――――しまった・・・。あの時・・・・・・・・。

コナンは、山尾を麻酔銃で眠らせた時のことを思い出していた。
今思えば、彼が意識を失う一瞬前、起爆装置をオンにしていたようにも感じる・・・。

そう思うコナンだが、何もかもが今となっては遅すぎる。
タイムリミットは15分。あの時、確かに山尾はそう言った。
どれほどの猶予が残されているか分からない。
「みんな逃げるんだ！爆発するぞ！！！」
「え？！」
コナンの突然の発言に、状況の読めない探偵団が聞き返す。
しかし、コナンは探偵団の疑問に答えず、「ぐずぐずするな！急げ！！！！」と叫ぶ。

ドーーーーーーン！！！！！！

耳障りな爆発音と共に、地震の様な振動が発生する。
一刻も早く、ここから避難しなくてはいけない・・・・。
コナン達は、ダムの監視が出来る高台へと急ぐ。

「冬馬、早く！」
元太が、冬馬の手を引きながら走る。
再び、爆発による揺れが発生し、バランスを崩した歩みが転んでしまった！

光彦は、歩美を助けようと立ち止まろうとする。
「止まるな！」そう光彦に叫び、歩美を起こす。
「大丈夫か？行くんだ、走って！」
――――このまま爆発が続いたらダムが崩壊する・・・・。
一瞬の思考がコナンの足を止めた。
その瞬間、コナンと先を行く歩美達との足場に亀裂を走らせる。
尚も続く不協和音。
――――この音、外壁が崩れ始めてる音だ。何とかしねぇと、決壊も時間の問題だ。
一刻の猶予もない・・・・。コナンはダムの縁に立ち、打開策を思案する。
辺りを見回すコナンの追跡眼鏡は、村の手前のスキー場を捉えた！

ドーーーーーーン！！！！！

「ケガはありませんか？」

「皆さんいらっしゃいますね？！」
一同を安全な場所へ避難させたダム職員達は、安否確認を行っていた。
みんな無事に避難した……ように思えた。
「コナンがいねぇんだよ！！」元太の発言により、みんなに動揺が走る。
「男の子がひとりいないんです！」
「わたしを助けた後、いなくなっちゃったみたい…」
あの時、コナンは確かに自分の後ろにいた。その後、歩美もコナンの姿を見失ってしまった。
「一体何を…」

哀がそう呟いた瞬間、一際大きな爆発が彼らを襲う。
「まずい！ダムが決壊する！」
「皆さん下がって下さい！」
が、探偵団には受け入れられない。
「ダメ！まだコナンくんが！」
「コナンくんが来るまで動けませんよ！」
まだ姿を現さない親友を待ち続ける。
「コナン……」
「何をやってるの？工藤くん…」
声にこそ出さないが、哀の心も不安が支配していた。

その時、エンジン音が響き、ダムの斜面を一気に滑り降りるコナンの姿が探偵団の目に写る。
コナンのジャンプと同時に決壊するダム。
奇跡的に脱出したコナンに、探偵団は喚声を上げた。
「やったー！」
「いけー！コナーン！！」
「え？どこ行くの？」

「彼、この水をとめるつもりよ！」
ただ1人、コナンの作戦を見抜いた哀が叫ぶ。
哀の発言は、探偵団や、回りの大人達を驚愕させるのに十分だった。
「無茶な・・・あんな子どもに出来るわけが・・・」
「巻き込まれたらひとたまりもないぞ！」
そう・・・、巻き込まれたら最悪、命を落とすことになるだろう・・・。
しかし・・・・・。
「出来るもん！」
「コナンなら出来るぞ！」
「少年探偵団に不可能はありません！」
かつて、コナンが起こしてきた数々の奇跡。それを目の当たりにしてきた歩美達は、こんな状況でもきっと奇跡を起こしてくれる。

コナンに不可能なことなんてないんだ！

歩美、光彦、元太の3人はコナンの奇跡を信じていた。
「頼んだわよ・・・、工藤くん」
走り去るコナンの後ろ姿に、哀は心の中で呟いていた。

――――――確か村の手前に使われていないスキー場があったはず・・・。あの新雪を使えば何とかなるかもしれねぇ・・・

そう考えたコナンは、村手前のスキー場を目指し、スノボを走らせた。

1．ダム決壊（後書き）

あこです♪
沈黙の１５分のラスト１５分が衝撃的過ぎて、思わず小説化しちゃいました（笑）
果たして、コナンは無事にダムの水から村を救うことは出来るんでしょうか。

2．逃避と疾走

ダムに行けば、携帯電話が使える・・・・。
コナンと連絡を取る為、蘭達はダムの職員が運転する車に乗り、北ノ沢ダムへと向かっていた。

キー

走っていた車が急停止する。
職員の目に飛び込んで来たのは、ダムが決壊し、大量の水が流れ込んでくる姿だった。
「大変だ・・・・。ダ・ダムが・・・・危険です！逃げねえと！」
突然の発言に驚いた小五郎、蘭、園子、阿笠の４人が弾かれたように前を見ると、ダムから水が溢れていた。
彼らを乗せた車は、来た道を逆走するほかなかった・・・・。

小五郎達がダムの異変に気付いた頃、コナンはダムから流れ出た濁流と並走していた。
――――――くそ・・・・、このままじゃ間に合わねぇ・・・・。危険だが、森を抜けるしかない・・・・っ！
覚悟を決めたコナンは、スキー場への最短距離である、危険な森を抜ける道にスノボを走らる。
一瞬の気の緩みが命取りになる・・・・。
そんな危険と隣り合わせの森を、的確なスノボ捌きで抜ける。
そこにあったのは、自分より僅かに後方を走る、濁流だった。
更なる森抜けの為、水の上を走るスノボ。漏電したのか、火花をあげている。
「くそっ！もう少しもってくれ・・・・」
コナンは、祈るような思いでスノボに命じ、更なる森抜け道に足を

踏み入れた。

その頃、村唯一の道路を走る車に乗る小五郎達も、先の読めない展開に、苛立ちを覚える。

「おいっ！この水が一気に流れ込んだら、あの村はどうなるんだ？！」

「大変なことになります・・・・」

「そんなんじゃ分かんないわよっ！」

「間違いなく・・・村は水没するでしょう・・・・」

園子の“もっとハッキリ教えてよ”という発言に、ダム職員は、覚悟を決めて答える。

自分達の予想と変わらない見解。しかし、改めて発言され、蘭や園子、小五郎と阿笠も言葉を失ってしまった。

村水没という、最悪の結末を防ぐ為、スノボを走らせていたコナンの目に、廃スキー場が飛び込んで来た。

「見えた！」

そう叫んだコナンは、スキー場に飛び込み、頂上へと上っていった。

コナンがスキー場に飛び込んだ瞬間、蘭達を乗せた車がスキー場前を並走する。

車に乗った蘭の目に飛び込んで来たのは、スノボを走らせるコナンの姿。

「コナンくん・・・・」

蘭の声で小五郎達も、コナンの姿を確認する。

「あいつ・・・・、何をする気だ・・・・？」

コナンは、スノボのターボエンジンのアクセルを踏み、急加速して山頂を目指す。

幾つもの「S」字を描くようにしてスノボを走らせるコナンの考え

に、阿笠が気付いた！
「雪崩じゃ！雪崩を起こし、水の流れを変えようとしているんじゃ！」
コナンの考えはこうだ。
水の流れを止めることは出来ない・・・。しかし、水の流れならば変えられる。
村に来たあの日、役場で山尾と氷川が雪崩が続発した為に閉鎖されたスキー場について話していたことをコナンは覚えていた。
だから、コナンは人為的に雪崩を発生させ、天然のダムを作ろうと考えたのである。

頂上を目指すコナンのスノボはもはや限界だった。
頂上まで1／3を残した辺りで、スノボは黒煙を吹き、停止してしまった。
慣性によって投げ出されたコナンが雪かは這い出すと、シュプールをつけるはずだった山頂への道を睨む。
「くそぉ・・・、くそ・・、くそぉー、くそ、くそー！！！！！」
やり場のない悔しさから、コナンは自らの眼下にある雪を殴る。

ゴ――――――

地響きのような音が聞こえ、真新しいシュプールから頂上に向けて地割れのような亀裂が入る！
亀裂は、コナンを越え、山頂付近まで押し迫った。

「あ、あぁ・・・・・」

コナンが声を出せずに驚いていると、それは発生した！

2．逃避と疾走（後書き）

あこです♪
やっぱ、セリフがない場面の繋ぎって難しいですね（笑）
あと、お話をどこで切るかも悩みどころです。

今回入れるつもりだった話を次回に回したので、次回かなり短い話になってしまうかも・・・（笑）

3. 雪崩

「ゴー」という、不気味な地響きのような音がしたかと思うと、雪の波がコナンに迫ろうとしていた。
間違いなく、コナンの作戦は成功したのだ。

迫り来る雪の波が、雪崩だと確認したコナンは、再びスノボに飛び乗り、アクセルを踏んだ。

「あいつ・・・やりやがった」小五郎も、“まさか”というような顔を見せる。
「逃げてぇぇ!!!!」
園子が、悲痛な表情で叫ぶ!
迫り来る雪の波は、スノボより早いスピードでコナンに追いつこうとしていた。

雪崩から逃げるコナンも、「間に合ってくれ・・・」と、必死にスノボを走らせる。

コナンが飛んだその時、スキー場を並走する車に、幼馴染みの姿を認めた。
その瞬間、蘭とコナンは、時間が止まったようにお互いを見つめていた。

「蘭・・・」

蘭の耳に、少年の声が届く。
どこか懐かしい少年の声。その姿に、愛しい彼が重なった・・・。

その長い長い一瞬をかき消すように、白く冷たい波は、コナンを飲み込む。
それを“現実”と認識した蘭は、走り去る車の中で悲鳴をあげることしか出来なかった。

白い波は、濁流の行く手を遮り、村へ直接の被害を与えることを阻止した。
たった1人の少年の犠牲の下、村は守られたのだ。
そう・・・・。哀しい奇跡の下に・・・・。

3．雪崩（後書き）

あこです！

ついに雪崩が発生しました。
しかし、作戦成功の代償は、大きすぎましたね‥‥。
それにしても、劇場版で水が絡むと、いつもコナンの身にシャレにならないことが起きてません？
しかも、今までで1番生死の境をさ迷ったというか、三途の川に両足突っ込んで渡りかけたようにも感じます。

では、あと僅かでしょうが、お付き合いいただければ幸いです。

4. 捜索

「コナンくん！」

雪崩が収まり、さっきまで自分達が走っていた道は、雪で覆い尽くされた。
蘭は、そんな雪山に閉じ込められた少年の名前を呼び、車から飛び出した。

「返事しろー！」
「何処だー！！」
「返事してー！」
皆で次々に叫びながら消えた少年を探す。
そんな中、雪に閉じ込められた少年――――コナンの耳に、自分を探す声が届いた。
――――――皆の声が聞こえる・・・・。どうやら巻き込まれずに済んだようだな・・・・・。オレも・・・ここから出ねぇ・・と・・・・。
そう思い、コナンはボール射出ベルトに手をかけようとする。
しかし、雪の重さで思うように身体を動かすことが出来ない・・・・。
――――――やべぇ・・・・、身体が動かねぇ・・・・。なん・・とか・・・・、なんと・・か・・・・・
そう呟きながらも、コナンの意識はどんどんと遠退いていく・・・・。

地上では、皆必死になってコナンの捜索を続けていた。
「コナンくん！コナンくんっ・・・・！コナンくんっ！！」
明らかに冷静さを欠いた蘭がコナンの名前を呼びながら、必死に雪を掘る。
「ガキンチョ・・・・、ガキンチョ・・・・！」
園子も、いつもは軽くあしらっているコナンの無事を祈りながら、

必死に捜索を続ける。
「何分だ?!アレから何分経った??!!」
「確かっ・・・・!」
「11分50秒・・・。雪崩が起こってからもうすぐ12分経つわ!」
時計を確認した阿笠より先に、哀が答えた。至極冷静に・・・・・。
「っだとぉ?!」
さすがの小五郎も、残された時間の少なさに焦燥感にかられる。
「ってことは・・・」
「タイムオーバーの15分まであと3分じゃ!」
「そんな・・・・・」
そう、雪崩に巻き込まれたとき、助かるのは15分。
そして、コナンに残された生存の可能性はたった3分・・・。たった3分しか残されていないのだ。
「みんなっ!江戸川くんを探して!」
今まで呆然と立っていた探偵団に向かって叫ぶ!
「まさかコナンくん・・」
「あの雪崩に?!」
「え〝ぇぇ?!」
ここに至り、初めてコナンの一大事を知った探偵団も、捜索に加わる。

必死になってコナンを探していた蘭は、ふと携帯電話を手に取り、アドレス帳から“江戸川コナン”を呼び出す。
――――・・お願い・・・っ、きって・・・
蘭は、震えながら必死に願った。
プップップッ・・・という音が、呼び出し音に変わる。
「かかった!」
そう叫んだ蘭の声に反応した小五郎が怒鳴る!
「みんな静かにしろー!小僧の携帯に耳をすますんだ!」その声を合図に、一同は捜索の手を止め、着信音に集中力を向ける。

ピリリリ・・・・・

小さな音ではあるが、皆の耳に携帯電話の着信音が届いた。

「っ・・・いた！」

次の瞬間、蘭は弾かれたように音がする方へと走る。

音の下、必死に雪を掘ると、“着信　毛利蘭”と表示されたサッカーボールのストラップがついた赤い携帯電話が表れた。

「あった・・・！コナンくんの携帯！」

蘭の叫びに、辺りに散っていた探偵団や園子達が駆け寄ってくる。

「ここだぁ！この辺りをくまなく探せぇ！！！」

小五郎の指示で、一同は携帯電話が発見された付近を必死で捜索する。

「くそ・・・ここでもないのか・・・」

雪山遭難者捜索用の棒でコナンを探していたダム職員が、悔しそうに呟く。

「そんな・・・、コナンくんどこ？どこにいるの？お願い・・・出てきて・・・・」

蘭は、必死になって雪を掘っていく。彼女が掘る雪が朱で染まった。

「蘭、手から血が・・・」

「何で・・・どうしていないのよ・・・、コナンくん・・・」

自分の怪我も、親友の声も届かず、蘭は涙にくれた。

「コナンくん・・・もう会えないの？」

今にも泣き出しそうな歩美が呟く。

3人の脳裏には、新潟に来た初日、ケンカした元太と光彦を諭すように言った言葉が蘇る・・・。

「一度すれ違ったら、二度と会えなくなっちまうかもしれねーぜ・・・」

優しく、温かいコナンの声。

「そんなっ・・・・」

「冗談だろ？」

「コナンくん・・・死んじゃいやー！！！」

今まで事件に遭遇し、幾多の死と向き合ってきた探偵団。

その死が今まで親友として困難を乗り越えてきたコナンと繋がり、

現実として彼らに襲い掛かる。

その恐怖を払拭するように、無我夢中になって身体を動かした。

――――――タイムリミットまであと1分を切ってる・・・

哀は時計を確認し、コナン・・・・・工藤新一に残された時間を確認した。

4．捜索（後書き）

あこです！

もう泣きながら書いてましたｑ（＜＿＞、）ｑ

まさか、「一度すれ違ったら、二度と会えなくなっちまうかもしれねーぜ」ってセリフがこんな重たい意味になるとは思いませんでしたよね。

あぁ、思い出すだけで泣けてきた・・・・。

次回は、最終回！

映画の内容を思い出し、思いっきり泣いてくださいね（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3189ba/

沈黙の15分～ラスト15分の奇跡

2012年1月14日13時52分発行